

第6回「高村・宮中塾」レジメ — テーマ「自由と平等」 —

日 時：2023年8月27日(日) 10:00～12:00
場 所：広島県労学協事務所+Web(816 6029 1088)



テーマⅠ 人間の本質から生まれた自由と平等

1) 科学的社会主義の学説は人間論を出発点とする

- 「人間にとっての根本は、人間そのものである」(全集①P.422)
- したがって、科学的社会主義の学説は、人間を「人間にとっての最高の存在」(同)にするために、人間の本質とは何かを明らかにする

2) 人間の本質は自由と平等

- 「労働が人間そのものをも創造した」(全集②P.482)
- 原始共同体の社会では、集団的作業としての労働は、人間の「自由な意識」(全集40 P.436)と「共同社会性」(同P.369)という二つの本質を生みだした
- 人間の「自由な意識」は、二つの本質から、自由と平等という第三の本質である価値意識をつくりだした
- 古代社会では、「自由、平等、友愛は、定式化されたことは一度もなかったが、氏族の根本原理であった」(全集21P.92)

テーマⅡ なぜ「自由と平等」は切りはなすことができないのか

1) 人間の本質にもとづく自由と平等の結合

- 「社会そのものが人間を人間として生みだすように、社会もまた人間によって生みだされている」(全集40P.458)
- つまり、人間と、生産と生活の場である社会とは、相互媒介の必然的関係にある
- したがって、人間は、個人としては「自由な意識」をもつと同時に、社会人としては「共同社会性」という本質をもつのであり、自由と平等とは、人間の本質に根ざした意識であるところから、本質的に結びついていて切りはなすことができない
- したがって、真の共同社会は、「最高の共同性は最高の自由である」(ヘーゲル「理性の復権」P.85)社会である

2) 階級闘争は人間の本質の疎外からの解放を求める

- 階級社会において、人間は、搾取と抑圧により、人間の本質である自由と平等から疎外されている
- 人間の本質からの疎外とは、人間は、自己の内部に本質である自由と平等をもち続けながらも、現象的にはその本質を疎外され、自由と平等を自覚しないまま生きることを意味する。
- しかし、人間は階級闘争を契機として、本質である自由と平等を自覚し、自由と平等の実現を求めてたたかうことになる
- 同時に人間は、階級闘争に勝利した人間解放のアソシエーションを、「真に平等で自由な人間関係からなる共同社会」(綱領)としてとらえる。
- 科学的社会主義の学説は、人間の本質を疎外から解放するという人間解放のヒューマニズムの学説であり、人間解放の中心的課題が「自由と平等」という人間の本質の回復である。

参考資料①

理論が大衆をつかむないや物質的な力となる。理論が大衆をつかみうるようになるのは、それが人に訴えるように論証をおこなうときであり、理論が人に訴えるように論証するようになるのは、それがラディカルになるときである。ラディカルであるとは、ものごとを根本からつかむことである。

ところで、人間にとっての根本は、人間そのものである。ドイツの理論がラディカルであること、したがってそれが実践的エネルギーをもつことの明らかな証拠は、それが宗教の決定的な積極的な揚棄から出発したことである。

宗教の批判は、人間が人間にとって最高の存在であるという教説で終わる。したがって、人間をいやしめられ、隷属させられ、見すてられ、軽蔑された存在にしておくようないっさいの諸関係を、くつがえせという、・・・至上命令をもっておわるのである。（「ヘーゲル法哲学批判」全集①P. 422）

（科学的社会主義の学説が）真のヒューマニズムであるとする根拠は、ヒューマニズムを一人ひとりの人間が他の人間を人間として尊重すべきだとする道徳や倫理の問題としてではなく、社会の構造にかかわる問題としてとらえ、しかも「ブルジョア啓蒙運動の最初の形態、すなわち一五世紀と一六世紀の『ヒューマニズム』」（全集 22P. 21）のような抽象的なヒューマニズムではなく、人間疎外をもたらす搾取と階級そのものを廃止して人間を「人間にとっての最高の存在」とする具体的かつ科学的ヒューマニズムの立場にたっているところにあります。（「21世紀の科学的社会主義を考える」P. 147）



定価 4,000 円

参考資料②

労働はあらゆる富の源泉である、と経済学者たちは言っている。自然が労働に材料を提供し、労働がこれを富に変えるのであるが、その自然とならんで一労働は富の源泉である。しかしそれだけにとどまらず、労働はなお限りなくそれ以上のものである。

労働は人間生活全体の第一の基本条件であり、しかもある意味では、労働が人間そのものを創造したのだ、と言わなければならないほどに基本的な条件なのである。

(「猿が人間化するにあたっての労働の役割」全集 20P. 482)

労働は、使用価値の形成者としては、有目的労働としては、あらゆる社会形態から独立した、人間の一存在条件であり、人間と自然との物質代謝を、したがって人間的生活を媒介する永遠の自然必然性である。(「新版・資本論」①P. 79)

生産活動の仕方のうちに一つの種の全性格、その類性格があるのであって、そして自由な意識的な活動は人間の類性格である。(「経済学・哲学手稿」全集 40P. 436)

人間の本質は、人間が真に共同的本質であることにあるのだから、人間は彼らの本質の発揮によって人間的な共同体を、すなわち、個々の個人に対立する抽象的・普遍的な力ではけっしてなく、それ自体それぞれの個人の本質であり、彼自身の活動、彼自身の生活、彼自身の精神、彼自身の富であるような、社会的な組織を創造し、産出する。(中略)人間が、自己を人間として認識しておらず、それゆえ世界を人間的に組織しおえないうちは、この共同的本質は疎外の形態のもとで現象するのである。

(「ミル評注」全集 40 P. 369)

存在、事実のみならず、当為や価値をも認識するところに人間独自の意識形態があるのであり、存在に対して当為を、事実に対して価値を認識するところに人間としての存在理由があるのです。

人間としてどう生きるべきかという生き方の当為が「人間的価値」とよばれるものです。人間は変革の立場にたって「人間的価値」を探究するところに人間の第三の類本質があるのです。(「21世紀の科学的社会主義を考える」P. 73)

自由、平等、友愛は、定式化されたことは一度もなかったが、氏族社会の根本原理であった。そして、氏族はさらに一つの社会制度全体の単位であり、組織されたインディアン社会の基礎であった。だれもがインディアンに認める不屈な独立精神と個人的な威厳ある態度とは、これによって説明される。

(「家族、私有財産および国家の起源」全集 21P. 93)

参考資料③

社会そのものが人間を人間として生み出すように、社会もまた人間によって生みだされているのである。

活動と享受はそれらの内容からしてもまたあり方からしても社会的であり、社会的な活動と享受である。自然の人間的あり方は社会的な人間にとってこそはじめて存在する。けだしここでこそはじめて自然は人間にとって人間との絆として存在し、他人にとっての彼の、および彼にとっての他人の存在として存在し、また人間的現実に必要な要素として存在するのだからであり、ここでこそはじめてそれは彼自身の人間的存在の基礎として存在するのだからである。（「経済学・哲学手稿」全集 40 P. 458）

理性的存在者としての理性と自由はもはや理性と自由ではなく、個別的なものである。したがって、人が他者と取り結ぶ共同性は、本質的に個人の真の自由の制限とみなされてはならず、その拡張とみなさなければならない。能力の面から言っても、実行の面から言っても、最高の共同性は最高の自由である。

しかるに、この最高の共同性においては、まさしく観念的な要素としての自由と自然に対立したものとしての理性は完全に消滅するのである。

（「理性の復権」P. 84-85）

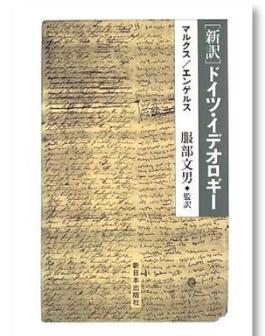


共同社会のこれまでの代用物、すなわち国家などにおいては、人格的自由は、支配階級の諸関係のなかで育成された諸個人にとってだけ、そして、彼らがこの階級の諸個人であったかぎりだだけで、存在した。

これまで諸個人がそこへ結合した見かけの共同社会は、つねに彼らにたいして自立していたし、また同時に、それはある階級の他の階級にたいする結合であったので、被支配階級にとっては、まったく幻想的な共同社会であっただけでなく、あらたな桎梏でもあった。

真の共同社会においては、諸個人は、彼らの連合のなかで、また連合をとおして、同時に彼らの自由を獲得する。

（「新訳・ドイツイデオロギー」P. 85）



参考資料④

われわれはたがいによりはっきり人間の本質から疎外されているために、人間の本質の直接の言葉はわれわれには、人間の尊厳を傷つけるものに思われ、反対に、事物の価値という疎外された言葉が、公認された、自信にみちた、自己自身を承認する人間の本質のように見えるのである。（「ミル評注」全集 40P. 382）

労働は労働者にとって外的なもの、つまり彼の本質に属さないものであり、それゆえに彼はみずからを彼の労働において肯定せずに、かえって否定し、快く感じないで、かえって不幸に感じ、どのような自由な肉体的および精神的エネルギーをも発揮することがなくて、かえって彼の肉体を傷め彼の精神を壊すところにある。

それゆえに労働者はやっとな労働の外で自身の下に居るように感じ、そして労働のなかでは自身の外に居るように感じる。彼は労働していないときにアット・ホームであって、労働しているときにはアット・ホームではない。それゆえに彼の労働は自由意志的なのではなくて、強いられたもの、強制労働である。（「経済学・哲学手稿」全集 40P. 434）

人間は人間の類本質が疎外されたとき、疎外からの解放を求めて階級闘争に立ちあがるのであり、その意味で階級闘争は人間の類本質に根ざしたもっとも人間的な真のヒューマニズムの運動です。その真のヒューマニズムの運動をつうじて真のヒューマニズムの社会を実現することになるのです。したがって人間解放を求める階級闘争は「たたかい、争う」という用語にもかかわらず、その内実としては人間を「最高の存在」にしようという真のヒューマニズムの立場にたった真のヒューマニズムの運動です。

（「21世紀の科学的社会主義を考える」P. 252）

自由な労働が土台でありうるのは、ただ、自由な労働が自分の生産諸条件の所有者である場合だけである。自由な労働は、資本主義的生産の内部では、社会的労働として発展する。だから、自由な労働が生産諸条件の所有者である、ということが意味するのは、生産諸条件が社会的になった労働者たちの物であって、この社会的になった労働者たちが自分自身で生産を行い、自分自身の生産を、社会的になったものとしての自分たちのもとに包摂するということである。

（『1861-1863年草稿』, MEGA II /3. 4, S. 1523-1524 「資本論草稿集」⑦P. 517-518）

社会主義・共産主義の社会がさらに高度な発展をとげ、搾取や抑圧も知らない世代が多数を占めるようになったとき、原則としていっさいの強制のない、国家権力そのものが不必要になる社会、人間による人間の搾取もなく、抑圧も戦争もない、真に平等で自由な人間関係からなる共同社会への本格的な展望が開かれる。

人類は、こうして、本当の意味で人間的な生存と生活の諸条件をかちとり、人類史の新しい発展段階に足を踏み出すことになる。

（日本共産党綱領）

討論 メモ用紙

討論テーマⅠ 人間の本質から生まれた自由と平等
〈メモ〉

10:40～11:00

討論テーマⅡ なぜ「自由と平等」は切りはなすことができないのか
11:40～12:00
〈メモ〉

230723 第5回「高村・宮中塾」～感想文集

7/23 労学協事務所にて第5回「高村・宮中塾」を開催し、8名(Web含む)が参加しました。参加者からの感想を紹介します。

学習会に参加しての感想

- 40才前半に「反デューリング論」で「自由とは必然性の洞察である」を読んで、本当に「目からウロコ」で感激をしたのがきっかけで、哲学の面白さに目覚めたという経験があります。その後、ヘーゲルの自由論に出会い1歩前進。
- 自由について考えさせられました。若い人たちが社会に出るのに、すぐに辞めたり、そもそも出られなかったりしています。今ほど自由のない時代はないと思います。
- ヘーゲルの自由論、第四段階までのことが理解できました。
- 学習することで、新たに取り組む課題がみえてきたように思います。概念的自由がより豊かになるよう、実践・学習をすすめていきたいと思います。
- 参加者が質問や意見、感想などを休憩時間を含めて活発にだしている雰囲気がいいなと思います。「学びたい」との強い思いが伝わってきます。

疑問に思った点・深めたいと思った点

- 今、社会から独立してフリーで働く人が増えています。その人たちの仕事が、やりたい事である場合、“労働”になるのか？労働時間短縮は彼らの課題なのか？四段階の自由の発展のところは、頭がついてゆけずもう少し考えないと分かりません。
- 内容は難しいですが、不思議とよく分かった気になります。何が分かったかと聞かれると、すぐに答えられないのですが・・・。
- 真理にしても、自由にしても、そのものにこんなに多くの意見があり、また研究がずうっとされていることに共産党に出会わなかったら、知らないままの人生だったと思うと共産党に出会えて良かったと感じられる話でした。

理解できた点・面白いと感じた所

- 現状を分析するのは大切だし、正確に要求をつくっていくのが運動のポイントかと思います。さらに、この枠組みを超えて先を見据えて”どうあるべきか”まで考えないと本当の運動とは言えないのかと、山の高さにおじけづいています。労働から解放されて考える時間がないと、自由に生きていることにはならないというのは実感としてあります。
- 高村先生より「労働が人間をつくってきた」との解説では、私の人生を振り返ってみても「苦しい労働」でしたが、ほんらいの「楽しい労働」になるべく人間としての「自由」、社会・共同体をつくるための労働を解説していただきよく分かりました。
- 「自由の発展」という考えがいいですね。より豊かにしていくためにも、頭と体を鍛えないといけませんね。

学習会に関する要望

- 時間配分、分量もちょうどいいと思います。参加者の意見を出し合える時間も確保できるので。

自由記入

- 次回の「自由と平等」というテーマは、少しは理解できるような内容でもあるし楽しみです。12月の望年会もとっても楽しみです。リラックスした中で高村さんの話が聞けるのが楽しみです。

7/23 第5回高村・宮中塾 参加者8名(Web含む)



9/14は
資本論第1部出版
156周年！



次回のお知らせ

日時：2023年9月27日(日) 10:00~12:00

場所：広島県労学協事務所+Web

テーマ：「法則について」

内容：①運動法則

②合法則的發展とは何か

